
僕等はいつも一緒

蒼井 優紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕等はいつも一緒

【Nコード】

N3191C

【作者名】

蒼井 優紀

【あらすじ】

僕は、ごく普通の高校生。でも、僕には大好きな彼氏がいる。同じクラスの石川健吾。付き合っているという秘密を持った二人が学園生活を送っていく恋愛小説。

僕と健吾（前書き）

この話には、ボーイズラブの要素が含まれます。苦手な方は遠慮願います。

僕と健吾

僕、神口悟は報徳進学園に入学してから1年と半年が過ぎようとしていた。

そして、僕には彼氏もいた。

そう、僕はいつのことからか男を好きになっていたのである。

彼の名前は、石川健吾。

僕と同学年でクラスも同じ1つ年上のちょっと不良が入った男子である。

彼と出会って3ヵ月になるが、クラスメイトは僕達の関係には気付いていない。むしろ、この関係がばれたりしたら、多分学校を退学させられるかもしれないから……

そのため、僕達は密かに放課後や夜、デートをしていたのである。

彼との出会いは今でも頭の中に鮮明に残っている。

それはとある放課後のこと。

僕は委員会のやる事が少し残っていたため1人教室に残っている時『ガラガラ』とドアの開く音がした。僕は、顔をドアの方に向けてみると、そこに立っていたのは今の彼氏である健吾だった。

僕は、（嫌だなあ）と思った。

その頃の健吾は、万引き・恐喝は当たり前で、何度も警察の人に世話になっていったんだ。

そんな健吾が僕に近づいてきて声を掛けてきた。

「おまえ、なにしょんの？」

その頃の僕は、健吾とはあり関わりたくなかったので冷たい態度をとって言葉を返した。

「別に委員会でする事が残っているからそれを片付けているだけ。」
後から聞いた話だけど、健吾はこの時告白をしようと心に決めて僕に声を掛けたいらしい。でも、僕が冷たい態度をとったものだから半ば諦めていたんだって。

でも、あの時ちゃんと告白してくれたんだから今の僕達があるんだけどね。ある意味、健吾に感謝しなくちゃね。

「ふうん、そっか。ところでお前今彼女とかおるん？」

「別にいないけど……」

「おらのや。なんで？ お前もてそうやにな。彼女作る気ないんか？」

「別に今彼女とか作りたいたいと思わないし。」

それを聞いたとたん、健吾が僕の目の前に立って真剣な顔でこう言っただ。

「俺、お前のことが好きなんや！！！」

僕は、この言葉を聞いたときビックリしたというか頭が真っ白になった。そして、ふと冗談だろと思った。

あの毎日女遊びをしてそうな健吾が何で僕に告白を？ 男である僕に？ そんな事を頭で思っていると、健吾は僕の顔の前に顔を突きだしてきて、突然キスをしてきた。そして、健吾は何も言わずに走って教室を出ていった。

その時、僕は何か何だかわからなくてパニックになっていた。

でも、健吾が

「お前のことが好きなんや!!!」と言った時の真剣な顔。まだ、ほのかに僕の唇に残っている健吾の唇の感触。それから僕は、健吾をよく目で追うようになりその時の事を思い出しては笑顔がこぼれていた。たぶん、僕は段々と健吾にひかれていき後々OKの返事をして今にいたる。

けど、こんな僕達にある事件が起こった。

2人の関係がばれたのである。

放課後

僕達は、いつも通りに学校から今日あった事などを話しながら一緒に帰っていた。そしたら、突然に健吾が僕に質問をしてきた。

「悟、今日暇か？」

僕は少し考えてから答えた。

「今日は、暇だよ。塾もないし、テストもないしね。それがどうしたの？」

「いやな、カラオケに行こうかと思って」

「カラオケ？」

「そっ！カ・ラ・オ・ケ！！！」

健吾は楽しそうに笑顔で僕に言った。

「カラオケかぁ。いいよ！でも、二人で？」

「いいや。あと3人呼んでる」

「3人も呼んでるの？健吾って、意外とこんな時って行動が早いよね。でも、後の3人ってだれ？」

僕は、不思議そうに聞いた。

「えっと、三守と咏希と池神だよ。」

この3人は、三守映己・咏希美帆・池神辛で僕と同じクラスの人達で池神とはよく一緒にいる友達だ。

時たま、健吾は池神に嫉妬するらしく怒ってくる。

後の2人は一緒にのクラスだが少し話すぐらいの仲だ。

「そうなんだ。で、どこに集まるの？」

「今日の18時に、三守の家の神社に集まる予定だ。ちゃんと来いよ！」

「うん、わかったよ！」

「じゃ、18時にな！俺の愛する悟☆」

そう言って、健吾は帰っていった。

僕は、恥ずかしながらもちよっと心のなかでは嬉しかった。

僕は、腕時計を見た。

「まだ16時30分だから、まだちょっと時間があるな。少し、買い物してから行こうと」

その時点で、僕達の関係がばれるとは夢にも思わなかった。

――夕方18時――

18時ぴったりに僕は三守さんの家の神社に着いた。三守さんは、もう家の前で待っていた。

この人は、この神社の神主の娘で将来この神社を継ぐ人だ。見た目・性格は小さい頃から教育をされていたので至って真面目な人だ。

そして、少し遅れてちよつと派手な咏希さんと池神がきた。

咏希さんは、健吾と仲がよくいつも一緒にいるんで遊んだりしている。僕的には、ちよつと苦手な人だ。

池神は、小さい頃からの友達で俗に言う幼なじみっていう感じだ。それに少し遅れてきたのが健吾である。これで5人全員が揃った。

「よし、これで全員揃ったな。じゃ、出発しようか!」
と、健吾がリーダーみたいに言うと同時に、咏希さんが健吾に質問をした。

「ちよつと、今日どこのカラオケに行くわけ? 昨日この服買ったばっかで、あんまりお金持っていないんだよね」
すると、健吾は

「今日は、俺達の奢りだ! なっ、悟!」

僕は、一瞬驚いたけど、一応健吾に合わせて返事をした。

「えっ……うん、そうだよ」

それを待っていたかのように、池神が言ってきた。

「本当か？正直言って、俺も金なかったんだよね。お前達のおごりなら、安心だね」

すかさず、僕は池神に反論した。

「ちょっと待って、池神。僕達のおごりとはいえ、池神も少し出してよ！」

「なんでだよー！だって、石川が言ってたじゃねーか。『俺達のおごりだから』って！」

「それとこれとは別！いいじゃん、僕達友達なんだから」

そんなこんなで僕達が騒いでる時、三守さんが口を開いた。

「あのー、もう18時30分なんですけど。私、21時位には帰らなくちゃならないから、早く行きませんか？」

それに答えるように健吾が言った。

「ああ、そうだな。それじゃ、行くか！」

僕達5人は、神社を後にしてカラオケボックスに向かった。

その時空は少しづつ暗くなり始めていた。

カラオケボックス

僕達5人は、19時にカラオケボックスに着いた。部屋は意外と5人にしては広い部屋になった。

早速、部屋に入るなり健吾はマイクをとって歌いだした。僕達はボックス内にあるタンバリンやマラカスでリズムをとり盛り上がっていた。健吾が歌い終わると次は池神が歌いだした。

「どうやったか？俺、歌上手かったやろ？」

「うん！本当に上手だね！」

「やっぱ、俺は何しても様になるな。あ、そうや。悟、一緒にジュース買いにいかんか？」

「いいよ。」

僕は、すんなり返事をした。

「じゃ、行こうか。皆、俺達ちよつとジュース買いに行ってくるから楽しんでな」

僕達は部屋をでた。

そして、自動販売機でジュースを買って僕は、部屋に帰ろうとした。と、その時健吾は僕の腕を持ち引き寄せ、キスをしてきた。

僕は、びっくりした。

「ちよつ…健吾どうしたの急に？」

健吾はちよつと切なそうな顔で僕に言った。

「最近、お前を見ていると心配になってくるんだ。実は、俺のこと遊びなんじゃないかって…それで、不安になって…」

僕は、健吾がこんなに僕のことを思ってくれていることに、とても嬉しく思った。

「そんな…遊びなんかじゃないよ。本気で健吾のこと好きだよ」

「……本当か、悟？」

「うん、本当だよ」

僕は、そういいながら健吾にそっとキスをした。そして、健吾に僕は言った。

「遊びだったら僕からこんな事しないでしょ？」

「そうだな。ありがとう悟」

そして、僕達は部屋に帰っていった。

この時誰もいないと思って、健吾にキスをしたがそれは大きな間違이었다。ちょうどその場面を、一緒に来ていた三守さんと、別の部屋で歌っていた学園の化学講師、新塚徹にいづかとおるが見ていたのだった。これが、ばれる原因となってしまうたのは言うまでもない。

そんな事も知らずに、僕達は部屋に帰り着いた。ドアを開けると、池神が熱唱していた。

「おっそーい！一体何してたの？たかが、ジュース買うぐらいでこんなに時間がかかってさ！こっち三守が途中で帰って池神と2人しかなくて、淋しかったんだから！あっ！もしかして、2人出てくるんじゃないの？」

咏希さんが少し怒りながらも冗談を言ってきた。

僕達は一瞬、咏希さんが言った言葉に『ドキッ』とした。でも、素早く健吾がフォローしてくれた。

「何言ってるんだよ！大体、俺達男やで！もし、付き合ってたとしても成績優秀の悟と俺が釣り合うと思うか？」

「そうだよ。成績優秀の神口と超大馬鹿の石川とじゃ、おいに釣り合わないわね！」

「そうだろ。って、咏希お前、大馬鹿は余計じゃないか？」

「あら、そう？見たまんまのことを言っただけじゃないか？」

咏希と健吾が騒いどるとき僕は動揺していた。でも、動揺しながらちょっと、三守さんの事が気になった。なんで、突然急に帰ったんだろう……僕は、理由を聞くため池神が歌い終わるのを待ち池神に

質問した。

「ねえ、池神。なんで、三守さん帰ったの？」

池神もちよつと疑問に思いながら教えてくれた。

「ああ、なんかさつきお前達がジュースを買いに行った直後に三守もトイレに行ってくるって出ていったんだ。そしたら、帰ってくるなり、『私、用事思い出したから帰る』って言って帰ったんだ」

「そうなんだ…」

「あつ、でもな、トイレから帰ってきたとき動揺してた様に見えたんだ。なんか、あつたのかな？ まっ、どうでもいいや！ 歌おうぜ神口！ あつ、それといい忘れたけど、化学の新塚が来てるらしいぜ。咏希が見たって言うんだよ」

と、突然咏希さんが僕達の会話に入ってきた。

「そうなのよ！ あの化学の新塚が来てたんだよ。彼氏から携帯に電話があつたから廊下に出て電話してたら、新塚が歩いてるの見ちゃって。私、新塚嫌いだから見つからないように隠れたんだけどね」

僕は、咏希さんの話を聞いてちよつと不安になってきた。

僕も苦手な講師で、29歳で独身の講師だ。
僕は、入学してきた当初から目の敵にされてる為に苦手になったんだ。

その講師が一緒にいる。ということとは、もしかしたらあの事が見られているかもしれない。ましてや、三守さんにも……

そのため僕は、不安になった。一気に血の気が引いた。その様子をみていた咏希さんが声をかけてきた。

「ちよつとどうしたん？ 顔色悪いよ、神口」

「う、ううん。何でもないよ……」

僕は、咏希さんに動揺がばれないよう平静を装って答えた。

それから僕達は、1時間位歌って、カラオケボックスを後にした。
その時、空は真っ暗だった。

時刻は、21時20分を差していた。

僕達は、池神と咏希さん、僕と健吾で分かれてそれぞれの家路にいた。

僕達は歩きながら他愛もないことをはなしていた。そしたら、健吾が僕に質問をしてきた。

「悟、途中から元気がなかったけど、体の調子でも悪いんじゃないのか？」

僕は、やっぱり健吾に話しといた方がいいと思い重い口を開いた。

「別に何もないんだけど、ただ……」

「ただ、どうしたん？」

「ほら、カラオケに行った時化学の新塚講師がいたって言ってたでしょ？それに、三守さんも途中で帰ったから、もしかして僕達がしていたことを見られていたんじゃないかって……」

「俺達がした事って？」

「廊下でキスしたこと」

「ああ、あのことか。別に悟、その時誰もいなかったんだろ？」

「うん、そうだけど……してる時は、周り見えないから……もしかしたらって……」

「大丈夫だって！もし見られていたとしてもその時は、俺が守ってやる。だから、安心しな！」

健吾は、元気に僕にこう言ってくれた。

僕は、とても嬉しかった。

僕達は、そのまま帰路についた。

三守

あれから、数週間がたった。僕と健吾は今までと変わりなく学校生活を送っていた。

あれは、僕の思い過ごしだったのだろうと忘れかけていた時、事件は起こった

「なあ、悟。お前、三守の事どう思う？」

「どうしたの急に？三守さんの事をどう思ってた……」

「いや、別にふと思ったことで、深い意味はないよ！」

健吾がこう言い出したのには、理由があった。

今日の昼休み、屋上で寝ている健吾に三守さんが質問してきたのである。

―学校の屋上・昼休み―

「石川君、ねえちょっと質問してもいい？」

「ん？…誰だ？」

「私、三守映己だよ！」

逆光の中のシルエットは、同じクラスの三守だった。

「どうしたんだ、三守？質問って…」

健吾は、目をこすりながら三守に聞いた。

「いやね、石川君って神口君と仲がいいから神口君の事何でも知っていきそうだから……」

「で、三守が知りたい悟の事って何なんだ？」

健吾は逆に三守に質問した。

「それは……神口君って彼女とか好きな人いるの……?」

三守は、思い切って健吾に聞いた。

「悟に彼女? 聞いたことないな。あいつ、彼女とかいないんじゃない?」

「ほんとに? じゃ、好きな人とかは?」

「うーん、そんな話も聞いた事ないな。」

三守は、ちょっと笑顔になった。

「多分な。俺もよくわからんけど……」

「ありがとう、石川君。それが聞いたかったただだから。じゃあ、またね!」

三守は、屋上を後にした。

健吾は、一体何だったのだろうかと思いつつも、また眠りについた。

三守の想い

それから、一週間が過ぎた。

僕は、三守さんに放課後図書館に来てって言われた。珍しくその日は、健吾が風邪で休んでいた日だった。

僕は約束通り、放課後図書館に行った。

そしたら、そこには三守さんが立って待っていてくれた。

「神口君、ちゃんと来てくれたんだね。ありがとう。私、自分で呼んでおきながら内心ドキドキしていたんだ。もし、来てくれなかったらどうしようって……でも、来てくれたから嬉しいな」

「三守さん、来たけど僕はどうすればいい？」

「えっとね、神口君ちょっとこっちに来て……探してもらいたいものが……」

僕は、三守さんに言われるまま図書館の奥に入っていた。

夕日が射し込んでいた。

放課後の図書館って言うこともあり、あたりには誰も生徒はいなかった。

「三守さん、どんな本を探せばいいの？」

僕は、三守さんに聞いた。そしたら、三守さんは僕の手を握ってこう言ってきた。

「私、神口君の事が好き！入学式からずっと見てました。私と、付き合って。」

突然の告白に、僕はビックリした。

と、同時に健吾の顔がふっとよぎった。

僕は、返事をどうしたらいいか迷っていた。

三守さんを、傷つけないためにはどうすればいいか、そのため黙っていた。

すると、三守さんが口を開けた。

「……神口君、やっぱり石川君の事が好きなのね？だから、答えられないんでしょう？私見たんだ……この前キスしているとこれを……」

僕は、三守さんの口から意外な言葉が出てビックリしたと同時に、三守さんの顔を見れなくなった。

「やっぱりそうなんだ。石川君の事好きなんだ。ねえ、神口君。石川君のどこが好きなの？相手は男だよ！ねえ、神口君！」

僕は、ずっと黙っていた。

「ねえ、何とか言って！神口君」

三守さんは、今にも泣きそうな顔で僕にずっといいかけてくる。

僕は、その言葉を聞きながら重い口を開いた。

「三守さんの言うとおり、僕は健吾と付き合っているよ。健吾の事大好きなんだ。僕の事を一生懸命思ってくれて、不器用ながらに僕に優しくしてくれて……そんな、健吾が大好き。だが三守さんの気持ちには応えられない。男同士で変だとは思う。けど、僕は健吾の事が好きなんだ！」

僕は、切々と話した。

三守さんはそれを聞いて僕にこう言い残して帰っていった。

「私、諦めない。神口君が私に振り向いてくれるまでどんな手でも使ってみせる……」

僕は、家に帰ってからこの言葉がずっと頭の中に残っていた。

『どんな手を使ってでも……』

ちよっと、胸騒ぎがした。その夜は、更けていった。

三守の様子

僕は、ちょっと昨日の事で考えていたのであまり寝れなかった。そのため、寝不足になりながら学校に行った。

すると、風邪で休んでいた健吾が学校に来ていた。

と、同時に健吾と入れ替わるかのように三守さんが学校を休んだ。

担任が言うには、風邪で休んでいるみたいだ。

僕は、昨日のことを健吾に言おうか言わないか悩んでいたが、結局僕の心のなかにとめておくことにした。健吾に言っちゃうと三守さんに悪いからね。

「おう、悟！俺がいなくて大丈夫だったか？咏希達にいじめられなかったか？（笑）」

健吾が僕に元気に話をしてきた。

「うん、大丈夫だよ☆いじめられてもないしね（笑）」

僕は、笑顔で健吾に言った。

「そうかそうか、ならいいけどな！俺、風邪でダウンしているときずっと悟の事を考えていたんだぜ！何してるのかな？とか。あいてえーとかな！」

僕は、健吾の発する言葉一つ一つが胸に響いてキュンときた。

健吾はずっと僕の事を思っていてくれる。

《やっぱり、僕健吾の事が好きだ》

「っていうか、あんたと入れ替わりで三守が休んじやったよ。石川、三守に風邪でもうつしたんじゃないの？（笑）」

咏希さんが、話に割って入ってきた。

「んなわけないだろ！偶然の一致だよ。三守とは、逢ってもねーし」

「ふうん、まあそれは冗談何だけど。昨日、私三守に用事があったって電話したんだけどね。なんか、いつもの三守じゃなかったような気がするんだよね。」

咏希さんは、三守さんの様子がちよつと気になってるみたいで、どうしていつもと様子が違うと思ったのか咏希さんに聞いてみた。

「三守さんの様子がいつもと違うってどういうこと？」

「なんかね、空元気って言うかいつもの三守の声じゃないのよね。一生懸命に元気に見せているっていうか元気に装っているみたいな感じでね」

「そうなんだ……」

僕は、それを聞いたときあの言葉が頭をよぎった：『どんな手を使っても……』やっぱり、何かあると僕は確信した。

本当は、心にしまっておこうと思ったけど、やっぱり健吾に三守さんから告白されたことを話そうと決心をした。

前兆

僕は、健吾が校門から出てくるのを待っていた。

待ち始めてから数分が経った時健吾が友達と一緒に出てきた。

僕は健吾に声をかけた。

「ちょっと、健吾話があるんだけど…時間いいかな？」

「ん、話し？ いいよ♪悪いみんな、今日はやっぱ無理や！また、明日な！！」

健吾は、一緒に帰っていた友達にそう言って友達と別れた。

「で、話ってなんなんだ？」

「ここで立ち話もなんだから公園に行こうよ。そして、そこで話すよ。」

僕は、健吾にそう言って公園に行った。

公園に着くまで数分の時間、僕は黙って歩いた。そして、公園に着いた。

ベンチに座り、この前告白されたことを話した。

「健吾、僕ね…三守さんに告白されたんだ。それも、健吾が風邪で休んでいる昨日図書館で…もちろん断ったよ！でも…三守さんあのカラオケでしてたことを見てたらしく僕達の関係に築いちゃったんだ。だから、僕は三守さんに僕達が付き合っていることを全部話したんだ。そしたら、三守さん泣きながら僕にこう言ったんだ。『神口君が私に振り向いてくれるまでどんな手でも使ってみせる』って。それが、なんかずっと気になって…それに、咏希さんが言う

にはいつもと違うって言ってたし…だから…」

僕は、あの時言ったこと起こった事をすべて健吾に話した。

健吾は、話を聞いてとても困惑していた。

一生懸命理解しようとしていた。

健吾なりに理解しようとしていた。

すると、健吾が僕の顔をじっと見て笑顔で言ってくれた。

「悟、気にするな。お前に何かあったら俺が守るって言ったろ？だから、安心しろ！絶対に俺がお前を守ってやるから☆」

僕はその言葉を聞いて嬉しくなった☆今まで、悩んでいた事なんて忘れるくらい安心する健吾の声。

それから、僕達は公園を出て一緒に帰っていった。

そして、別れ際健吾が僕にこう言った。

「この事は、みんなには内緒だ。そして、三守が学校に来ても今まで通りに接しろよ！じゃあな！」

僕は健吾に何もかも話したのでちょっと、心の荷がおりたような気がした。

それから、3日がたった。三守さんは、風邪が治ったので、元気に登校してきた。

僕は、健吾の言うとおりにいつも通り接するようにした。

「三守さん、おはよう！」

すると、三守さんもいつものように挨拶を返してくれた。

「おはよう、神口君。ごめんね。あの時は…私、ちょっと気が動転しちゃって…誰にもあなた達の事は言わないから安心して！これからも、いい友達でいてね☆」

そう言って、三守さんは自分の席に着いた。僕は、ホッとした。やっぱりあの言葉は、別に何でもなかったんだなど。でも、それは大きな間違いに後になってわかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3191c/>

僕等はいつも一緒

2010年11月12日07時30分発行